CASE 4

［岩手県］
野田村（のだむら）

応援職員を村の一員に チームワークでスピード復興

津波で流された旧市街地。造成が完了したところでは、1棟目の住宅の建設が進む。
「1000年壊れない村づくりを」を目指す小田祐士（ゆうじ）村長は、
全国から集まった応援職員を村の一員として迎え入れて一刻も早い復興に挑んでいる。

★以外の写真=井上 健　取材・文=谷内信彦　（肩書きは2014年3月取材時点）

津波の被害を防ぐため、海岸線に3重の備えをプランニングした野田村の津波復興計画

住民が自力再建している住宅の前で、復興の状況を確認する小田村長（右）とUR都市機構の高橋（左）

「もうすぐ1棟目の完成ですね」「これからどんどん建っていくから」。野田村の小田祐士村長とUR都市機構の高橋伸は、村役場近くの被災地で感慨深げに言葉を交わした。

2人の横には、住民が初めて自力再建している工事中の住宅がある。周囲も造成工事が完了し、住宅の建設を待つばかり。震災から3年、野田村は岩手県内でも有数のスピードで復興を進めている。

NHK朝のテレビドラマ「あまちゃん」の舞台として、一躍脚光を浴びた岩手県久慈市。野田村はそのすぐ南に位置している。昔ながらの製法で作った「のだ塩」が有名で、ホタテなどの養殖漁業も盛ん。人口は約4600人だ。そんな小さな村が東日本大震災の津波で大きな被害を受けた。全世帯の約3分の1に当たる514戸が全半壊した。

野田村は以前にも、明治三陸地震、昭和三陸地震、チリ地震と、再三、津波で被災している。そのため小田村長は震災前から500年、1000年壊れない村づくりを考えていた。「自然はわれわれに恵みをくれるが、時に牙もむく。けど負けたくねぇ」。

この心構えがあっただけに復興の取り組みは迅速だった。小田村長は、震災翌日から村内を回って行方不明者を捜しつつ、村の将来を描いていった。

机を並べ名刺も同じに

地図の上に設定する安全区域は、長年の生活の中でいつしか埋没する。将来を考えれば誰の目にも見える線引きが必要だ。そのために、海岸の防潮堤（第1堤防）、三陸鉄道と国道45号（第2堤防）、盛土（第3堤防）による3列の堤防をベースにした津波復興計画を作った。

実際に野田村の復興を担っているのは20人以上のスタッフからなる「復興むらづくり推進課」だ。村の職員はその中の4人。他は青森から岐阜まで各地の自治体からの応援職員と、高橋らUR都市機構から派遣された職員だ。

「岩手弁に交じり、津軽弁の『～だっちゃ』や、岐阜弁の『～やわ』といった各地の方言が飛び交うユニークな職場です」（小田村長）。

2013年から野田村で働く高橋は語る。「村役場の同じ部屋に机を並べて、村の職員と同じデザインの名刺や身分証明書を用意してもらいました。感激と責任の両方を感じて、応援に来た全員が『自分の村を復興するんだ』という気持ちを持っています」。

小田村長は「彼らは村の一員のように働いているのではありません。本当に村の一員です」と言い切った。

そして、「私は、望ましいまちの将来像は描けても、実現する手立てを知らない素人です。UR都市機構をはじめとしたプロフェッショナルが、『この制度が活用できます』、『この法律を生かしましょう』といったノウハウを提供してくれたからこそ、復興が進んだんです」と続けた。

事業のハードルを先頭でクリア

UR都市機構は震災直後の2011年4月、いち早く野田村に職員2人を派遣。2012年に村役場に隣接する城内（じょうない）地区の土地区画整理事業や都市公園事業の具体化に向けた支援を受託した。そして、法律上の手続きや国や県との調整などで中心的な役割を担った。

こうしたUR都市機構の支援も含め、野田村が全力で事業に取り組んだ結果、まちづくり事業の手続きや申請上の課題を県内で最も早くクリア。冒頭のように村役場近くの事業地の一部で造成が完了し、村民が自力で住宅の建設を始めている。

「他の自治体から『野田村は早いですね』と言われることもありますが、決して早くはないんです」と厳しい顔で話す小田村長。「被災した方にとっては『もう3年』です。野田村のいいところは、住民同士の結びつきの強さです。それを元通りにするためにもさらにスピードを上げます」と決意を語った。

野田村名産のホタテ（上）と、「のだ塩」を使った塩ソフトクリーム（左）。村役場近くの仮設店舗で営業する魚屋で被災者の声に耳を傾ける小田村長（下）

野田村でのコーディネート業務は3月で完了。小田村長からUR都市機構岩手震災復興支援局長の佐々木功に感謝状が贈られた

★ 全国各地の自治体から派遣された復興むらづくり推進課のスタッフ（上）。高橋の名刺にはUR都市機構の文字はない。村役場の一員として業務に当たっている（中）。村役場の中の復興むらづくり推進課の執務室。村の職員と机を並べる高橋の元に小田村長が訪れて相談することも珍しくない（下）

野田村の海岸線を走る三陸鉄道の線路も津波への備えの一つ。今年4月に全線が復旧した